

聖書：創世記3：10～19

説教題：彼のかかどに

日時：2019年10月27日（夕拝）

前は3章9節までを読みました。神である主は、罪を犯したアダムにこのように呼び掛けました。「あなたはどこにいるのか。」言うまでもなく、神はアダムがどこにいるか、ご存知でした。彼がどんなにひどい辱めをご自分に加えたか、すべて見て知っておられました。にもかかわらず、直ちに彼を滅ぼすことをせず、「あなたはどこにいるのか」と呼びかけられました。これは彼に悔い改めを求める言葉です。あなたはどこにいるのか。あなたはわたしとの関係においてどこにいるのか。あなたは自分がしたことをどのように考えているのか。さてこの恵み深い神の問いかけに人はどのように応答したでしょうか。10～13節には落胆せざるを得ない人間の現実が記されています。2つのことに注目したいと思います。

一つはアダムは罪そのものではなく、罪の「結果」を悲しんでいるということです。なぜそういう状態に至ったのか、その原因である罪に思いを向け、悲しむことをしない。これは人間一般に見られる特徴ではないでしょうか。自分の不幸や悲しみ、悲惨については良く嘆くのですが、なぜそうなったのか、その根源にあるものには目を向けない。本来アダムはここで自分が神に対して何という恐るべきことをやってしまったのか、その自分が犯した「罪」にこそ悩まされるべきでした。「私はあなたに大変なことをしてしまいました。それで恐れているのです。」と言うべきでした。しかし彼は「裸なので」という表面の事柄を取り上げて、これを問題にしています。

神はそんな彼になお忍耐をもって関わってくださいました。11節で主はまずこう言われました。「あなたが裸であることを、だれがあなたに告げたのか。」もちろん神はそれが誰かを知りたくて、このように問うたわけではありません。これはアダムのための問いです。「だれが」と問うことによって、わたし以外の第三者に聞き従ったから、あなたは今の状態に至ったのではないかということを感じさせようとしています。さらに「あなたは、食べてはならない、とわたしが命じた木から食べたのか。」と問われます。主の願っていることはただ一つ。アダムが罪を認めて心から悔い改めること。そのために神は答えやすい質問をされました。アダムは「はい」と正直に答えるだけで十分でした。

しかしアダムは素直に認めようとはしません。2 つ目に注目するのは、彼がここで責任転嫁していることです。12 節のアダムの答えの中で、原文で一番最初に来ているのは「この女が」という言葉です。悪いのは「この女だ」と彼は言っているわけです。これは何というひどい言葉でしょう。彼は2 章最後の結婚において、彼女を喜びにあふれて迎え入れたはずでした。「これこそ私の骨からの骨、肉からの肉」とその幸せを歌いました。ところが今、自分の罪が指摘されそうになると、「この女が」と述べて彼女を見捨てています。自分と一体だと喜んでいていた相手を、自分と異質な、自分に悪影響を与える存在と見なしています。そして次にアダムの口から出て来た言葉は何でしょうか。それは原文では「あなたが与えた」という言葉です。「この女」と言った次には、「あなたが与えた」と述べて、今度は神に向かって指を向けるアダムの姿がここにあります。あなたがこの女を私に与えなかったら私はこのような罪を犯すことはしなかったでしょう、とでも言いたいかのようです。そして原文では一番最後に「私は食べました」という言葉が出て来ます。様々な理由を先に持って来て、自分がこうなったのはいかに仕方のないことかという弁解を彼はしています。

一方の女も同じです。13 節で彼女の口から最初に出て来た言葉は「蛇が」でした。そしてアダムと同様、「私は食べました」という言葉が一番最後にボソッと語っているだけです。

私たちはここに罪がもたらしたもう一つの恐ろしい結果を見ることができます。それは人間関係における断絶です。罪を犯して神との関係に重大なひびが入った結果、人間同士の間にも重大なひびが入りました。最も親しい夫婦関係にも「断絶」が生じ、お互いを非難し合い、咎め合って暮らすようになったのです。このことは神との平和の関係抜きには、人間が互いに平和に暮らすことは不可能であるという原則を私たちに教えてくれます。

さて主はこのような彼らに対して 14 節からさばきを宣告して行かれます。まず最初に語られているのは蛇に対しての宣告です。14 節：「神である主は蛇に言われた。『おまえは、このようなことをしたので、どんな家畜よりも、どんな野の生き物よりもろわれる。おまえは腹這いで動き回り、一生、ちりを食べることになる。』」蛇はこの結果、地面を腹で這いずり回るといふ辱めを受けることになりました。「ちりを食べる」とは、

これを食物とするという意味ではなく、地を這いずり回る結果、願わずしてその口に入り込んでしまうという悲惨な現実を意味しているのでしょう。次の 15 節では、そのサタンが頭が打たれるという決定的なさばきが語られています。どのようにしてそれが起こるかは後程もう一度見たいと思いますが、ここで注目しておきたいのは、サタンは必ず滅ぼされると言われていることです。蛇が地面を這っている姿を見るたびに、私たちはやがてその頭は完全に踏み砕かれるのだというこの約束を思い起こすのです。

次は女に対する宣告です。大きく二つのことが語られています。一つは出産の苦しみです。「生めよ、増えよ、地を満たせ」と言われていましたように、本来の出産は祝福に満ちた出来事でした。しかし今やこれに大きな苦しみが臨むようになりました。もう一つは結婚における夫妻のバランスが崩れることです。女は自分に与えられた助け手としての役割を越えて夫をリードし、人間が罪を犯すことに大きな役割を果たしてしまいました。それに対する報いとして、結婚関係の調和は失われ、妻は夫に支配され、隷属させられるということが言われています。これは人間の歴史の現実です。もちろん私たちはだからと言って、これで良しとするものではありません。夫妻の関係はキリストと教会の関係を反映すべきものと新約聖書で言われている通り、夫はキリストが教会を愛し、ご自身のいのちをもささげた姿にならなくてはなりません。そこに私たちが目指すべき目標があります。しかし現実にある力関係の不均衡は、女に対する神のさばきの一部を構成しているというのです。それはエデンの外における最初の女が犯した罪の重大さを指し示すものとなっているのです。

そして最後にアダムに対する宣告がなされています。その一つ目は労働に苦しみが入って来たということ。本来、労働は神の永遠の知恵と力を発見し、いよいよそれらを神の栄光のために活用して行くというやりがいのある光栄なものでした。しかし人間が罪を犯したことによって、人間が治めるこの世界にも罪の呪いが及ぶようになりました。先に神と人間の間に、また人間と人間の間に断絶が生じたことに触れましたが、それに加えて人間と自然の間にも断絶が生じるようになったのです。人間と自然の関係には不調和が生じ、大地はいばらとアザミを生じるようになりました。そのため、人は顔に汗を流して苦しみつつ、やっとの思いで糧を得なければならなくなりました。そうして苦勞に苦勞を重ねた末、土のちりに帰ると言われています。悪魔は 4 節で「あなたがたは決して死にません」と言い切りましたが、それは偽りでした！人は 2 章 7 節に記されていた通り、大地のちりを素材としつつも、神のいのちの息を吹き込まれて生きる者とな

りました。しかし人はそのいのちの根源なるお方を否定し、その方なしで生きようとしたため、ちりに帰ると言われています。あなたは「土のちりだから」という神のことは、彼らの罪を責める痛烈な言葉なのです。

以上、主の宣告の言葉を見て来ました。しかしここにはたださばきの言葉しかないというわけではありませんでした。この宣告には何と回復の希望も織り交ぜられていました。そのことにも目を留めたいと思います。まず女に対して出産の苦しみがあることが述べられました。しかし、です。それでもとにかく生き続けることは「できる」のです。「生めよ、増えよ、地を満たせ」という神がこの世界に対して持たれた計画は撤回されません。引き続き継続します。そしてこれが継続するという事は、どういうことでしょうか。もし今後、ただアダムとエバのような人間が生まれて来るだけなら、そういう人類が増えることはこの世界を益々恐ろしいものとするだけです。子どもの出産は世界を一層の罪で満たすという、何の良いところもない出来事となってしまいます。しかしこの出産を神が良しとされたということは、どのような形で神が人間に回復の道を備えようとしておられるということではないでしょうか。女はそれゆえに希望をもって出産することができるのです。

一方の男も、苦しんで食を得なければなりません、それでも食を得ることはできるのです。本来すぐにでも滅ぼされて然るべき彼のいのちはなお支えられるのです。そしてこちらにも同じことが言えそうです。もしただ一生苦しんで働いて、その末にちりに帰り、死ぬだけなら、そこには生きる意味も目的もなくなってしまいます。むしろ早く死んでしまった方が良いということにもなります。しかし神はアダムがとにかく生き続けられるようにしてくださいました。これもまた、どのようにしてか彼をやがて本来の歩みに回復させようとする神の恵み深い意図があつて初めて意味を持つのではないのでしょうか。

そして何と言っても今日の箇所における私たちにとっての希望は、15節の御言葉でしょう。これはしばしば聖書における「最初の福音」「原福音」などと呼ばれています。15節：「わたしは敵意を、おまえと女の間に、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」 最初の人間は神の愛を疑い、サタンの言葉を信じて、いわばサタンとの友好関係、同盟関係に入りました。そしてサタンに従った結果、サタンの支配下にある者となりました。人間はそこから自分自身を救

い出すことができません。そんな人間とサタンとの間に神が敵意を置くと言われます。これは言い換えれば、神が人間をサタンから引き離すということです。そしてそれはさらに神が人間をご自身の側へと取り戻してくださるということに他なりません。神はこの救いの約束を、人間が罪を犯しても悔い改めず、かえって責任転嫁し、さらに神に向かってさえ指を向けるという全く悲しむべき姿をさらけ出すばかりだったその時に、与えてくださいました。ここに私たちの救いはただただ神の一方的な恵みによることがはっきり示されています。

しかしこのためには神ご自身が大きな犠牲を払ってくださらなければなりません。15節後半の「彼」とは、その前の行に記されている「女の子孫」として、やがてサタンと最終的な戦いをする者、すなわち神がやがて与えてくださる救い主を指しています。その彼はサタンの頭を打つという決定的勝利を収めますが、その際、サタンによってかかとを打たれるという大きな痛手を被ることが言われています。つまり私たちの救いはただではないということです。ここにすでにやがての主の十字架における「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という叫びが予告されていたのです。この女の子孫の犠牲と勝利を通して、神は罪に落ちた人間たちを救ってくださるのです。

以後の聖書における救いの約束は、すべてこの創世記3章15節の約束の展開と言えます。神はこの約束に真実でいてくださり、ついに時至って約束の女の子孫をお送りくださり、救いの世界を私たちに開いてくださいました。そしてさらにサタンの頭を最終的に踏み砕くにあたっては、私たちをも用いられるということが、ローマ人への手紙16章20節に次のように述べられています。「平和の神は、速やかに、あなたがたの足の下でサタンを踏み砕いてくださいます。」 神の側へと引き戻された私たちは、今や敵意を正しい方向に向けて、キリストにあってサタンとの戦いに参戦し、悪魔の最終的さばきのために用いていただく者となると言われているのです。

以上、今日の箇所から、神は人間が墮落後、何一つ良い姿を示さなかった時、むしろ自分の罪を悔い改めることもせず、神に向かって反抗さえするという最も悲しむべき姿をさらけ出した時に、一方的な救いの約束を与えてくださったという驚くべき事実を見て来ました。ここに私たちのすべての希望があります。私たちはこの神を見上げて感謝し、それゆえに自分の罪を省み、それを告白し、神の憐れみにすがって、神がくださる

救い主に信頼したいと思います。その救い主の大きな犠牲のゆえに、ただ恵みによって救っていただけることを感謝したいと思います。そして神につく者とされ、正しい戦いをなす者とされ、救い主による最終的勝利とその祝福に導き入れられる幸いに歩ませていただきたいと思います。